

花の浮島のボーダーツアー

黒岩幸子

2019年 JIBSN セミナーは、可憐な花レブンアツモリソウを固有種とする礼文島で開催された。海外に出ない「ボーダーツアー」も定着し、今回のルートは稚内→礼文→利尻→稚内。礼文島から 3000km 離れた与那国島の参加者を含めて、台風が北上する日本列島各地から大勢集まって盛りあがった。回を重ねるごとにツアーに対する理解も深まり、多様なメンバーが各自の目的や関心に合わせてうまく調整しつつ参加している。私自身も 1 日目の稚内の日程はスルーして、夜の懇親会から合流した。

セミナー「境界地域の交通と広域連携」

セッション I のテーマ「交通」は、境界地域はもちろん日本の遠隔地が一様に悩まされる切実な問題だ。1 市 4 町の報告からは、域内交通、域外アクセス、海外アクセスという 3 つの категорияがあり、いずれも難しい課題をかかえていることがわかった。過疎と高齢化（礼文町は町民の 36% が高齢者！）の進む域内（市内、町内、島内、多島間など様々）の公共交通の維持だけでも苦しいのに、経費のかかる域外とのアクセスも確保せねばならない。各市町が工夫を凝らした交通形態の開発と導入に努力している様子が伝わってくる。

きめ細かな住民サービスのために、アプリと電話を使ったオンデマンドバス（乗合バス）の導入を検討している与那国町。観光客が使うタクシー不足を解消するために、ドライブシェア（登録した住民ドライバーが代替タクシーになる）を試している五島市。竹富町由布島では水牛車が活躍している。また竹富町では、市外からの交通アクセスを含めた複数の交通手段の検索、予約、支払を一括してできる MaaS (Mobility as a Service) を検討中だ。未来構想としては、日ロの子供たちの共同工作「夢の架け橋」が面白い。標津町と国後島に橋をかけて道路でつなぐアイデアだ。

セッション II 「広域連携」では、サハリン航路が運休している稚内、領土交渉が進まない根室と深刻な話が続いたが、特にショックだったのは対馬市の現状だ。対馬といえば、福岡、釜山などを取り込んだ広域連携を実行して、ボーダーツーリズム、国際学会、フェリー航路の活用など、常に境界地域の先頭を走り続けて注目されてきた島だ。

対馬市を訪れる外国人観光客はここ数年で急増して 40 万人を超えた。その 8 割が韓国人で、経済効果は年間およそ 80 億円。ところが、例の輸出規制にともなう日韓の関係悪化で状況は一転、韓国からの観光客は今年 6 月から減り続けて、今や昨年度比で 8 割減という。特に釜山からのゲートウェイにあたる比田勝が大きな打撃を受けている。韓国人観光客を予定していたホテルもフェリー航路も予約キャンセルが続出。なかには、退職金をはたいて観光分野で起業して、大きな負債を抱え込んだ人もいるそうだ。

観光ブームの危うさを思い知らされる報告だったが、対馬市は、韓国に出向いて PR 活動

をするなど日韓関係の好転を見据えた対策をとっている。日韓政府の政治劇は現在も続いているが、こういう事態に巻き込まれない、境界地域の健全な広域連携の構築はいかにあるべきか、はからずも、新たな課題を提起したセミナーだった。

島内交通を一人で実証実験

セミナーのテーマが交通なのに、全行程をチャーターバスで移動というのはいかがなものか。翌日のエクスカージョン前半をスルーして、実証実験に挑むことにした。というのは口実で、こっそりトレッキングに出かけた。礼文島には魅力あるトレイルコースが7つもある。2014年に礼文岳と桃岩展望台コースは歩いたので、今回はやや地味な礼文林道コース(8.2km)を選んだ。

前夜、林道入り口までのタクシー予約をホテルのフロントに頼んだ。すぐ電話してくれたが、応答なしとのこと。タクシー会社が夜8時に店じまい? 3連休で島のタクシーは出払っているのかも。セミナーではタクシー不足を報告する自治体も多かったので、やや不安になって部屋に戻った。

翌朝、心配していた天気は崩れず、6時前にフロントに出向くと、運転手のおじさんが私を待っているではないか。フロントの方が夜に電話をかけ直して予約を入れてくれたのだ。タクシー会社といっても個人経営、昨晚8時は温泉に浸かっていた電話に出られなかったそう。この運転手さんは、私が予定していたのと逆方向にコースを歩けば、歩いて町の中心部に戻れると教えてくれた。そこで、香深井まで送ってもらい、ついでに島の話も色々聞かせてもらった。今年は例年より暖かいが、観光客数はそう伸びないとか、島の平地は限られていて、そこに昔はジャガイモ畑などあったけれど、今ではみんな観光施設になったとか。

入り口で降りると「気をつけてねー」とタクシーは引き返していき、私はほとんど親戚のおじさんに送ってもらったような気分で歩き始めた。クマがいないので一人でも安心、雨上がりの湿った木々の香りに包まれて、なだらかな林道を進む。最初に見えた海は左右の丘陵の斜面に挟まれて、さかずきに青い水を注いだよう。誰一人会うことなく道も眺めも良いコースを静かに踏破した。町に出る途中で桃岩展望台への近道があったので、そこも登ってみると、こちらはまばらだが観光客らしき人がいた。風は強いが、桃岩と海と緑の絶妙なコントラストが広がっている。





運転手さんのアドバイスに従って逆ルートを歩いたおかげで、ピスカ 21（セミナー会場や郷土史資料館がある町民活動総合センター）に戻っても合流時間までたっぷり余裕があった。すぐ隣に小さな公園を見つけて、飲み水を補給、登山靴を洗ってリュックの中身も整理、木陰で一休みした。なんと登山者に優しい町なのだろう、感激。

必見!! 礼文町郷土資料館と利尻町立博物館

島をバスで周回しているみなさんのバスが戻ってこないのので、私は一足先に郷土資料館に入ることにした。実は、トレッキングが長引いたら、ここもスルーのはずだった。私の経験から知るところでは、観光地の博物館というのは、たいてい陳列物（玉石混淆か石だらけ）をおぎなりに並べただけの残念なところが多いからだ。

しかし、私の予想は完全に覆された。礼文町郷土資料館は、規模は大きくないが、展示がよくまとまっていて、初めから終わりまで興味の尽きない構成になっている。館内ルートに沿って見学すれば、縄文時代から現代まで、この島でどんな人たちがどんな暮らしをしていたのかが見えてくる。そのうちバスが到着して、学芸員さんの解説つきツアーが始まったので、私も途中からそこに入り込んだ。

話を聞きながら、この資料館のレベルの高さは、学芸員のレベルを正確に反映したものだという当たり前のことに気づいた。考古学が専門というその学芸員は、礼文島について簡潔かつ魅力的に語ってくれた。そして、礼文がトレッキングに適した美しい島であるだけでなく、学術的にも宝の島であることを知った。礼文のように小さな島で、漁業に携わる人が住める場所は特定されている。つまり、縄文時代から現在まで島の同じ場所に人が住み続けている。地面を掘れば年代順に遺跡が埋まっているとも言える。島外からやってきた研究者がそのまま永住するのも頷けるといえるものだ。

礼文を歩いて色丹島に似てると思った。なだらかな丘陵がいくつも重なり、海の中に緑の絨毯が敷かれたような穏やかな風景、クマなど人を怖がらせる生物がいない。古代から人が住み続けている。礼文町郷土資料館に匹敵する博物館が色丹島にできる日はいつだろうか。古代から先住民、日本人、ロシア人に至る生活はどのように展示されるだろうか。郷土史博物館や歴史博物館を見れば、その地域、その国の知的レベルがすぐにわかる。やはり博物館

と名のつくところには、必ず立ち寄ることにしよう。

お隣の島の利尻町立博物館もりっぱだった。こちらでは生態系に詳しい、いわゆる理系の学芸員さんが登場して、礼文に負けないくらい面白い解説をしてくれた。私には2012年8月に利尻山に登頂して感動した思い出しかなかったのだが、今回訪ねて、旧石器時代から近世まで30カ所以上の遺跡があると知った。



両島の資料館と博物館の入館料は大人で300円と200円。トークの上手な学芸員は、なぜかみんなイケメン。絶対に外せない島の観光スポットだ。

稚内でお別れ

最終日の朝は、稚内在住の写真家、斉藤マサヨシさんの案内で猿払へ足を伸ばした。彼が撮った宗谷地方やサハリンの美しい作品は、稚内空港や複合施設「稚内副港市場」など、市内のあちこちで鑑賞できる。

海沿いに走って、1939年12月に猿払沖で座礁し、多数の犠牲者を出したロシア船「インディギルカ号遭難者慰霊碑」、1934年に設置された北海道と樺太海底ケーブルの中継所にある記念碑「樺太との電気通信ゆかりの地」、「間宮林蔵 渡樺出航の地」（本当に出発したのはもう少し離れた別の地点らしいが）などを見学した。最後はまた稚内方面に戻って、現在修復中の「旧海軍大湊通信隊稚内分遣隊幕別送信所（稚内赤れんが通信所）」を訪ねた。



インディギルカ号の記念碑



海底ケーブル記念碑



間宮出航の地



赤れんが

こうして予定の日程をすべて消化した参加者は、飛行機、鉄道、車、それぞれの交通手段で帰路に着いた。なかには出発前に、副港市場 2 階の温泉で一風呂浴びてゆく旅上手な人たちもいる。初日と最終日は稚内で、中日は礼文での宴会がえらく盛りあがったことも付け加えておこう。

稚内市と礼文・利尻・利尻富士町にはとてもお世話になった。稚内では商工会議所からいただいた「わからない地域商品券」を使ってお土産をゲットしたり、礼文では生まれて初めてトド肉を食したり。利尻の滞島時間はわずかだったのに、充実したエクスカージョンを準備していただいた。来年は沖縄で、与那国から波照間へ飛ぶ企画がもう練られているそうだ。